2020年から2022年の世界の激変に考える
―日本における宗教的教養の教育について―

湯峯　裕
YUMINE,Hiroshi

［キーワード：超越的絶対者、自己と向き合う、大きな力、「畏れ」と「癒し」、宗教教育］

要　旨

ウクライナからの突然のニュースに驚くと同時にそれを信じられない自分があった。その次にやってきたのは、事態に対して全く無力の自分に気が付くことであり、それまでの教育者としての自分の実践の無意味さについての驚愕であった。私がやってきたこと。それは虚構の平和によって辛うじて成り立っている幻想を追っていたのだ。現状を嘆いても仕方がない。様々な活動をおこしている若者たちもいる。では自分にできることは何か。これまでの反省から、宗教とくにキリスト教と仏教についての考察を通してこれから日本において目ざすべき宗教教育の方向性について考えた。日本人の心を支えているのは仏教だけではない。もう一つの宗教的感興。それは神道と言えなくもないが、そのように言語化されるとその宗教的感興が違ったものになる。言語化されない先にある感興によって日本人の心は支えられている。そこからこそこれからの教育を起こすべきだと考える。

１、はじめに

2020年のコロナ禍。姿の見えない得体の知れないものに対する不安と恐怖の日々が続いた。その中で生活様式が大きく変わり人間関係も違うものになっていった。それが元に戻ることもなく新たな形で進んでいかざるを得なくなっている。先の見えない未だに展望の開けない中で2022年

には戦争という理解を超えた報道が飛び込んできた。これから先がどうなるのか予測もつかないのだが、これまでにない新しい力関係の世界がやってきそうである。それを思うと今までの自分の小ささに改めて気が付くと同時に、愕然とした思いに囚われてしまう。それを今書き留めておかないといけないとの思いから、現代社会、宗教、教育について考えてみた。

２、ウクライナの衝撃

自分の前に現れたその姿なき顔の力強さと荘厳さに撃たれて立ちすくむ。自分の存在の小ささと弱さに身がすくんでしまう。それが宗教的な「畏れ」である。だが、そんな自分を力強いその顔に向けることで包まれる安らぎもある。それが宗教的な「癒し」である。その「畏れ」も「癒し」もキリスト教と仏教とでは全く質が違う。就職して間もない 20 代の頃、家の墓を大阪に移す時、「これはあなたのおじいさんが作ってくれてお寺に納めた線香だよ。これに今から火をつけるから。」と言って、お寺の和尚はそれでお経をあげてくれた。まだ幼かった時に亡くなりほとんど記憶にない祖父だが、読経の声と線香の匂いの向こうに祖父が浮かんでくる。それが日本的な宗教感覚である。五感で向き合う。日本人の宗教性は言語を越えたところにある。眼・耳・鼻・舌・身体の感覚。それを包むのが意識であるが、西洋のように言語化される意識ではない。宗教的な「畏れ」や「癒し」は共通するのではあるが、自己との関わり方はキリスト教と仏教とでは違っている。私にとっては仏教的な感覚で生きる力を与えられていたのであるが、2020 年になってその生き方が揺らぎ、2022 年になってそれが根底から覆された。

2 月、ウクライナからの突然のニュースに目の前の現実が信じられなかった。まさか実際に戦争が起こるとは。平和を語りながらも頭の隅では直接戦い合う事態が起こるとは思ってもいなかった。それが空虚な思い込みであり幼稚な期待であったことが暴露された。確かに世界中で戦争や紛争は続いている。ニュースで次々と知らされている。1991 年 1 月、湾岸戦争では実況中継が延々と続き、私は入院中のベッドの上でぼんやりと眺めていた。報道を見ても頭の中では無かったことにしていたのかもしれない。直視していなかった。自分と関わる問題として捉えていなかった。そして今、ヨーロッパの地で領土を取りにいくための戦争が現実に起ころうとは。誰もが信じられない思いにとらわれたであろう。

その現実を見つめていくうちにやがて心に現れてきたのは、これまで40年以上教育に関わってきて、私は一体何をしてきたのだろうという脱力感である。私が高等学校の教師をしていた大阪の教育では平和や人権には特にこだわってきた。それだけでなく、私は国語の教師として現代や古典の様々な文章を生徒たちと読んできた。それは知るため、理解するためだけではなく、言語の力を養って世界を自分の確かな目で見て判断して行動するためでもある。だがそれが儚い思い込みの上に成り立っていた幻であることを思い知らされた。私は一体何を教えてきたのだろう、何をしてきたのだろう。教師である前の一人の人間としての自分は何だったのか。限りない無力感に襲われた。後に私が目標にしてきた先輩教師から同じ思いを聞かされたことで、これが決して私の独りよがりではないことがはっきりした。ウクライナとロシアの特殊な事象ではない。いつどこで起こるのか全く分からないし可能性を否定できない事態である。我々の身勝手な思い込みの上に仮そめの平和があった。平和の幻影といった方がよいかもしれない。その上に立ってお気楽な平和教育をしてきた。空疎な言語教育をしてきた。そんな虚しさにとらわれたのである。若くまだ駆け出しの頃、教職員組合の平和集会で東京まで一緒に行った人は、このニュースを見る直前の２月初旬に他界した。もし見ていたらどれだけ心を痛めただろうか。

今年も美しい月を眺めていた十五夜の中秋の名月と１ヶ月後の十三夜の後の月見。自然と自分が一体というよりも、自分が自然の中に溶け込んでいく感覚を味わった。自分は自然の中の一つ。他者もその一つ。日本的感覚においては、他者との対立はないとは言えないが一時的なものである。それが西洋の価値観との違いである。自分をいつまでも押し出すことはない。回復不可能な対立はない。イギリスのパブで、私だけが飲む酒にジュースで付き合って話を聞いてくれたイスラム教徒の青年もいた。イスラム教やキリスト教やその他の世界でも違う論理で同じことが実現するはずだ。そう信じていたことの愚かさ、軽薄さにウクライナは直面させた。

ウクライナへの侵攻が始まってしばらくして、SNS上では映画の「007シリーズ」の映像が溢れ出した。東西冷戦の対立の構造をもとにする作品が多く、事情は分からないがベルリンの壁が崩壊した年に発表されてから次の発表までに６年ほど空いてまた制作されている。学生たちに聞くとほとんどは知らないと言う。それでもこれだけ溢れていたのは、「007シリーズ」を知る世代の誰かが発信し、次にそれを見た誰か、それまでよく知らなかったが面白そうだと考えた誰かが新たな映像を探し出して次々と載せたという、SNSならではの発信の連鎖があったと考えられ

る。その発想の短絡さと恐ろしさに気がついたのかどうかは分からないが、やがてSNS上からは消えていく。この件に限らず、SNS上での様々な現象が示すことの一つは、考えの短絡さ希薄さである。物事をじっくりと考えて自分なりに責任を持てるようになってから発信するという時間の掛け方がなくなりつつある。平和の問題を考えるもっと前の段階で思考の停止が始まっている。何が起こるか分からない現代であり、人々の命を脅かす異常な事態が起こっても、それに抵抗できる持続的な思考力や判断力が希薄化して時代の流れに歯止めをかけられない現代になっていっている。そんな事態が私の焦りに追い討ちをかける。

３、宗教に何ができるのだろうか

この現代に対して宗教は何ができるのだろうか。宗教では、腹一杯の食事にありつけることも暖かい暮らしを手に入れることもできない。しかし、心が空疎になった時にその隙間を埋めてもらうことができ、精神的な寒さを感じている時に心の温かさをもらうこともできる。でも、それだけでよいのだろうか。

2021年3月、警察隊の前に跪いて1年前のクーデターに反対するデモの参加者を守ろうとしたミャンマーの修道女の姿がインターネット上で紹介された。それで一時的には警官隊の動きを食い止めることはできた。同じように跪いて手を合わせる警察官の姿までもある。感動的な光景である[1]。だがそれ以上の抵抗はできない。微力である。そうであっても、宗教の力はそれだけなのだろうか。コロナ禍が世界中に蔓延している時の2020年3月、無人のサンピエトロ広場でローマ教皇が祈る姿が世界に流れた[2]。それだけではコロナ禍に対しての直接的な効果は何もないのだが、それを見ていて教皇の声を聞いて、目の前の展望が全く開けなくて打ちひしがれている心に温かく生きる望みを与えてくれたのは事実である。「みな同じ船に乗っている」「みんなして一緒に船をこがなくてはなりません」の言葉に勇気をもらった。コロナ禍を食い止めることはできないのだが、力が湧いてくる。2011年4月、震災の東北を訪れた天皇皇后両陛下が海に向かって深々と頭を下げられる姿がテレビに映し出された[3]。その光景も、事実としてはただ頭を下げているだけである。けれども、その姿には人を力づけるものがある。

キリスト教はその伝道の歴史の中で幾多の迫害を乗り越えてきた。多くの命が奪われながらもその姿勢を貫いてきた。対して仏教はどれだけできたのだろうか。実はそこにキリスト教やイスラム教と仏教との決定的な構造的違いがあるのだが、それは後述する。ただ、いずれの宗教にせよ、コロナ禍にも戦争にも具体的な抵抗はできない。では何ができるのか。精神的な支えになることが宗教の役割だとも考えられるが、こんな現代を前にしてそれだけでよいのだろうか。

４、キリスト教と仏教

近代になって科学技術が発達してきたが故に深刻な問題になってきた温暖化対策をはじめとする地球環境の保護の問題。マルクス主義の破綻による国際的な力関係の変化。それに加えて資本主義の構造変化も言われる。人間を取り巻く世界を科学の合理主義で語ることの限界が見えてきたように思える。世界を説明できる一元的な価値の物差しが存在しないことが分かってきた。そこで、多元的な価値観への見直しが進み ESD あるいは SDGs が語られるようになっているのであるが、その一方で市場経済では自己責任的競争主義的な一元的価値観が蔓延してきている。デジタル機器をはじめとする IT 技術の発展に伴う経済的な競争は、もはや人間の力では制御が効かないところまで膨張している。株価の高騰と暴落はコンピューターが作っている。競争に勝つという競争のための競争は人間の生活を遥かに超越して無限の塔を積み上げている。人類を何度も絶滅させ得ると言われている核開発競争に匹敵する恐ろしさである。その上、多元的な価値観への見直しを言いつつも、温暖化対策の必要性は自明であるのに、それぞれの国の利益を優先して現実には進まない。食糧問題や環境対策などの格差は残されたままである。価値観の多様化多元化を唱えながら国際間のエゴイズムはますます露骨になって新たなナショナリズムが進行しつつある。その一つの象徴がクリミア半島の問題から続くウクライナ侵攻である。そういったエゴイズムにこそ宗教はブレーキをかけてきたのではなかったのか。

キリスト教の神は絶対的な他者であり超越的な存在である。人は神によって創造されたものであるから、すべて神の威力のもとにある。それに向き合って原罪を抱えている自分を点検しながら生きていく。世界を物質化して分析して観察し、その分割と総合によって世界を再構成する近代的な科学的合理的視点も、神の眼差しの構造を借りている。全ての現象を合理的あるいは物理

的に分割していっても、そこには必ず神の俯瞰的な視線がある。自分の精神をとことん分析し自分の存在を思うということに突き詰めていったデカルトも神を否定できない。世界の全ては自分が世界を見るその視線によって存在するとまで言って自分を世界の中心に据えたカントでさえも神は否定できない。神の眼差しに向き合うことで神の視線を背後に感じることで自分の生を支えてきた。ずっと向こうにある超越的な絶対的存在があることで自分の生を実感してきた。

その基本的な骨組みは仏教でも同じである。ただ、仏教では超越的で絶対的なものを存在するものとしてはおいてこなかった。キリスト教が神と向き合った構造は、仏教では振り返って自分と向き合う構造になる。自分をどこまでも掘り下げていったその向こうに超越的な絶対の境地を求めていった。それゆえ、絶対を求めていく視線が向かうところは逆向きであり、求めてたどり着いたところには何もない。何もないから世界と一体化でき、そこには対立も何もないのである。それを法（ダルマ）といいその状態が仏（ブッダ）である。それゆえ仏は存在者ではない。存在でさえない。人と人との間に求めるものはかたや隣人愛でありかたや慈悲であって、生きている人にとっては同じことを求めているのであるが、その真実を求める視線は仏教とキリスト教には根本的な違いがある。どんな苦難が訪れようとも常に神と対話し続けたヨブに対して、自己と地上とに対話したのがコヘレトである。神を語っても視線は人に向けられている。それは仏教に近い。だが、仏教と違うのは、コヘレトが語る言葉の後ろに常に神がいる。神に守られた中で豊かな言葉を縦横に発して織物を織り上げていく。仏教には背後で守ってくれる超越者はいない。自己を究極まで突き詰めてその先に見つけた真理に至ると言葉は消えていく。言葉のない真理の宇宙があるだけである。神がおり言葉がある。そこの違いがキリスト教の強さである。

キリスト教の強さは神に常に神と共にあることから来る。多くの迫害や殉教者の歴史があった。それを乗り越えて世界的な普遍的宗教として広がっている。その世界観によって近代の科学的的合理主義の視点がある。世界を超越的な俯瞰的な視点から眺めて普遍的な真理を見つけるのは神の視点と同じである。世界を認識している自己の意識を客観化していっても最後にそれを考えている自分の意識は残っている。デカルト的自己を乗り越えたはずのカントでさえやはりそれを見ている自己を乗り越えられていない。20 世紀になってカント的な自己意識さえも乗り越えたはずなのに、関係性の中に超越的な自己を消してしまったはずなのに、それを考えている自己はやはり停めおいたままで来てしまっている。超越者としての神の視点は越えられない。だが、そ

れが西洋の諸国の強さの源である。自己が世界の中心である。それが世界を動かしてきた。その力が日本の仏教にはあまり見られないように思える。

檀家として壇那寺とつながったり、そこまで関係はしなくても葬儀ではなくてはならないものであったりすることが多い日本の仏教であるが、そもそも大乗仏教よりも前からある具足戒で出家は葬儀をしてはいけないことになっている。仏教が本来備えているはずの宗教性を見失ってはいないだろうか。そもそも仏教の本来の姿は合理性を追求する哲学である。すべての存在を追求していってたどり着いたのが因果論の究極にある「空（くう）」であり、人の意識を掘り下げていってその先に見えたのが最下層の第８識の「阿頼耶識（あらやしき）」というフロイトでいう無意識に近いものである。言葉が及ぶのは一つ上の「末那識（まなしき）」までであり、「阿頼耶識」には及ばない。もちろん「空」にも言葉は及ばない。仏教が追求するのは悟りであり、究極の個人の世界である。それゆえに現実の世界に及ぼす力は弱い。確かに奈良時代以降特に鎌倉仏教から現代に至るまで、社会的な影響を及ぼした仏教の力も少なくないが、キリスト教ほど広く長期的に国を動かす力となったかどうか。中国から日本にまで伝わった北伝の大乗仏教は東南アジア方面への南伝の仏教を小乗仏教と蔑視したが、南伝の仏教は国を動かしているように思える。バンコクの仏教寺院に人々が集まって礼拝している姿を見た時の新鮮な感動は今でもはっきりと覚えている。クアラルンプールの寺院で見たイスラム教の人々の礼拝の姿がそれに重なる。では、日本では仏教では社会を動かせないのだろうか。

ここまででは第３節に対する答えにまで至ってはいないのだが、これ以上の比較と考察は本稿では本線を外れてしまうだけでなく私の力がとても及ばないので、これまでの比較を踏まえた上で次に日本における宗教教育に絞って考えを進めていく。

５、日本における宗教教育の可能性

これまで、宗教を教育で取り上げることを避ける傾向が強かった。近代の歴史への反省からそれはあってよいのであり、特定の宗教に与する教育は当然避けるべきではあるが、宗教的な教養は必要である。さらにそこから踏み込んで、宗教的感情をより大切にする教育的働きかけをこれから考えていく必要がある。教育基本法でも、「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的

な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。」（第十五条）としている[4]。日本の教育では、この「宗教の社会生活における地位」についてあまりにも及び腰であった。これからは、日本人の心情の奥底を流れている宗教的な感興にもっと向き合わないといけない。同じく第二条にある教育の目標の特に四・五[5]を実現するためにもそれは必要である。私立学校では宗教教育を教育課程の中に組み込んでいるところもあるが、公立学校ではほとんどできていない。

聖公会の本学に来るまで、私はキリスト教をほとんど知らなかった。確かに欧米の文学を読むための基礎的知識として学んではいたが、それは理解を助けるための知識でしかなかった。私にとっての宗教的感興とは仏教であったが、それも弱いものであった。ところが、本学に来て、聖書やその解説書を読む機会が増え、さまざまな人々のキリスト教についての考えや思いに接するようになった。自分の体験と絡めながら聞くようになって、また話を聞かせてくれる人の実体験を踏まえた思いに触れるようになって、キリスト教は知識だけではなくなり、心に響くようになってきた。それがやがて仏教的な心とも共振するようになってきた。そこにあったのは、何か大きなものに向き合って自分の心を開くこと、開いて委ねることであった。その大きなものとは、キリスト教では神だが、仏教では諸仏の向こうにあるもっと大きな何かであるという決定的な違いがあり、それについては既に述べたのだが、そこに共通する心の穏やかさを感じた。最初に書いた「畏れ」は恐怖ではない。偉大な力に対面する心の緊張であり同時にその力に身を委ねる心の安らぎでもある。それはやがて「癒し」にもなる。

日本人が感じる「畏れ」と「癒し」。それをここまで仏教を通して書いてきたが、実は日本人はそれを仏教的なもので感じるだけではなく、その先にある何か得体の知れない大きな力から感じている。それは自然発生的なアニミズム的な感興からくるものである。夕日に手を合わせるのは仏教的な信仰からくるのであるが、反対の朝日に手を合わせるのは仏教ではない。遥か向こうの方から来る言葉では表現できないが何かがありそうな力に対してである。仏教では西方の浄土だけでなく東方にも浄土があるのだが、日本人の感覚に東方の浄土は馴染んでこなかった。そのはるか向こうからやってくる力を折口信夫は「まれびと」とした。海の向こうの遥か彼方すなわち「常世（とこよ）」からやってくる力である[6]。キリスト教やユダヤ教では神は天上から力を及ぼすのだが、日本ではそうではない。水平線の向こうからなのだと折口は考えた。海の向こうに限ること

はなくあらゆるところからやってくると考えてよいのだが、その力は人だけでなく生き物だけでなく地上のすべてのものに及んでいる。大きな力はどこでも人と共にいる。神社の参道では真ん中を歩かない。山の中での食事ではまずひと口はそこの地面に置く。最近はあまり見られなくなったがお正月は門松と注連縄で迎えて共に食事をする。そんな中で生かされているのである。それが力に対する「畏れ」と「癒し」である。このアニミズム的感興はキリスト教世界にもかつてはあったようだが、現代においては消えてしまっている。日本ではいつまでもそれが残っている。

この日本の古代からある宗教的感興は、近代になって西洋と対抗するための教義あるいは観念として言語化して神道としてまとめ上げられて変質してしまい、国家的機構の中に組み込まれてしまった。その反省から特に教育の場ではそれに言及することは避けられてきた。だが、言語以前のものとして、あるいは大陸から文字言語が伝わる前からそこにあるものとして人々の心を動かしてきた話し言葉として、日本語の奥に潜んでいる。超越的な絶対的存在が作るものでなく、既にあるものとしての存在として「浮ける脂(あぶら)の如くしてくらげなすただよへる」[7]ものから成り上がって生まれてきたとする命であり、それ故に、我が身を取り巻く全てに命を感じ取る。動物も植物も鉱物も全てである。宮沢賢治はそれを様々な童話に取り入れ、宮崎駿は映画に取り入れた。あまねくあるのだがこれだと特定して形としてはとらえられないものである。どう表現してよいかわからないのでとりあえず神様と表現した。だが特定のものを指しているのではない。それは神社に御神体という言葉があってもその像がないことに表れている。偶像崇拝を禁止しているのではなく偶像そのものがないのである。日本を多神教と呼ぶのは間違っているのかもしれない。超越的な絶対的存在が天上にあり人が見上げているのではなく、海の彼方からやってくるのを迎え入れる。後にはそれが山にも結びつくのだが、祈りは流れ落ちる滝にも向かいそこから漂ってくる力を迎え入れる。そこにあるのがその力に生かされている感情である。守られて生きている感情。今生きていることの奇跡的事実。ありがたみ。命の温もりは理論では感じ取れない。仏教でも神道でもないその先にあるものとしての感興。それを実感する教育が必要なのである。確かにこれだけでは世界に広がる戦争も紛争も防げないし、環境問題や経済格差の問題にも解決策を見出すことはできない。それでもこの一歩から始めるしかない。

ユダヤ教と向き合ったレヴィナスは『倫理と無限』の冒頭で、「ひとはどのようにしてものを考えはじめるのでしょうか。」という対談者の問いかけに対して、「多分、言葉という形ではおよそ表現しえないような外傷（トラウマ）や手探りから始まるのでしょう。」[8]と応える。「聖書と哲学」という対談のテーマであるがゆえに「思考する機会を与えるのは、書物を読むことによってです。」と続け、さらに「書物は私たち人間の存在様式のひとつであるのに、情報源、学習のための「道具」、教本とみなされているのです。」と嘆く[9]。書物に向き合い自分の発する言葉に責任を持つ彼の姿勢が表れている。その姿勢は傷つきやすいが思いは深くなる。彼は語ることあるいは語り合うことが人の生を支えると多くで語っている。その彼を支えたのが聖書であり、「『聖書』は〈書物のなかの書物〉であり、そこでは根本的なこと、つまり、人間の生が意味をもつために「言い表わされなければならなかったことが述べられて」[10]いると語る。書物であれ対面する人であれ、対等にじっくりと向き合って相手の言葉を受け止め、それに対して誠実に応える。これを彼は「倫理」という。現代社会において大きく脱落し始めたのが彼のいう「倫理」である。

「倫理」は相手のために選び取るもののではなく、自分にとっての避けられない責任であるとレヴィナスはいう。相手が語り、それを受け止めて自分が語り、二人の語りの交わったところに新たな自分が生まれる。その責任は自分が自分であるためのものである。だから責任であり逃れられないものなのである。その結果、二人が一人になるのである。「意識する私」としての自己の存在の他者に対する具体性つまり肉体として私はあるのだが、意識としては一つになっている。実はこれは仏教でいうところの「不二」に近いものである。自己と他者というものを対立的にとらえるのではない。善と悪、美と醜や自と他の二項を対立的にとらえる（すなわち「分別」）のではなく、その対立を乗り越えるべく自分の対立する心に向かうことである。ただ、「不二」といって全く区別がないとするわけではない。自と他の総合されたところに自分があってこそ利己的なとらわれのない視野の広い自分自身の生がある。この自己と他者との「不二」は、西洋哲学でいうところの間主観性に近い。間主観性にはそれでもそれぞれの自己が残されてそれを保ったまま総合しているのに対して、「不二」ではその自己に対する執着を乗り越えるという違いがあり、間主観性にはまだ言葉があるのに対して「不二」は言葉を乗り越えたところにあるという違いもある。それでも、自己に囚われないあり方としては同じことを言っているのである。フッサールやハイデガーに多くを学んだレヴィナスはもちろん「間主観性」で語っている

のであるが、日本人とも交流があったので「不二」は聞いているかもしれない。人はそこに立って初めて視野の広い思考や配慮の深い思考が始まるのであり、そうでない場合は単なる思いつきあるいは反射的反応でしかない。これが今は蔓延している。

レヴィナスの「倫理」も仏教の「不二」も、文字が伝わる以前の日本には、古代から我が身を取り巻く自然のえも言われぬ大きな力と向き合う時の無言の語りとしてあった。海に向かった時あるいは山に向かった時、日本人はそこにどこからともなく心の開けを感じる。対立もなく言葉もない世界である。対立する他者に立ち向かわない、あるいは立ち向かえないことの弱さでもあるが、教育の場ではそれは強みとして生かしていける。議論で対立し競い合ってもそれは仏教で言えば「不二」に至る一つの過程である。「不二」に至る前にはまずそれぞれの個を尊重し合う段階が必要である。そこでの対立は必要なのである。それを昇華しての「不二」である。この仏教の「不二」とさらにその奥底にある日本古来の大きな力と向き合う無言の語り。教育にこの静かな時間を取り入れることで、持続的な思考力や判断力の希薄化や短絡的な思考なき思考に歯止めをかけたい。さらに無意味な対立という軽挙を忌避する姿勢を育み、どこからともなくやってくる大きな力に守られた寛大な思考と行動を育てていきたい。教育の現代的な課題から様々な取り組みが様々な言葉で語られているが、それによって子どもたちは忙しくなっている。後ろから急き立てられて余裕がなくなっている。成果を短時間で出そうとする ICT 化がそれに拍車をかけている。そんな子どもたちに、ゆったりとした時間の中で静かな思いに浸る環境を作ってやる必要がある。相手を攻撃するだけの言語、思慮なき言語が飛び交う現代にこそ、そんな時間が必要であると考える。まだまだ答えにはなっていないし、現代の危機的な状況に対する抵抗力にもならないが、ささやかな一歩でも可能な限り踏み出していかねばならないと考えている。

６　おわりに

現代社会の憂慮すべき流れに対して私が抵抗できるのは何だろうかと考えた時、踏み出せる一歩は教育の場でしかない。それが螳螂（とうろう）の斧であろうとも確実に振り下ろせる自分の斧はそこでしかない。この緊迫した現代において、子どもたちの心に迫っていける教育は、誰でもが持っていてしかも気付かないうちに人を突き動かしている心の奥底にある心性に働きかける教育である。

それを考えてみた。明治になって日本はその伝統的な価値意識を捨てて西洋的な価値観で教育を推し進めてきた。圧倒的な力を誇る諸外国に対抗するためには仕方のないことであったし必要でもあった。そのことを否定すべきではない。だが、その時に捨ててきたはずの伝統的な価値意識は、それにもかかわらず人々の日常生活と言語の中に持続的に息づいてきた。伝統的な日本文化という言葉を出すと冷笑的な反発を受けることが少なくないのだが、日本列島に生まれ育った者はその価値意識を日常の言語にも生活様式にも持っておりそこからは逃れられない。今こそその心性に向き合って心の奥底から動かす教育が必要であると考える。人間性の涵養はそこに根差さないといけない。まだまだ考えが足りないまとまりの悪いものになったが、ここから具体化を考えていきたい。

【後注】

---

[1] https://www.afpbb.com/articles/-/3387816

[2] https://www.bbc.com/japanese/video-52082982

[3] https://www.kunaicho.go.jp/activity/daishinsai2011/gohomon/gohomon-1-2011-01.html

[4] （宗教教育）
第十五条　宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。
2　国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

[5] （教育の目標）
第二条　教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。
一　幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
二　個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
三　正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
四　生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
五　伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

[6] 「「とこよ」と「まれびと」と」『折口信夫全集　４』中央公論社 1995（平成 7）

[7] 中村啓信訳注『新版 古事記 現代語訳付き』,KADOKAWA,2009（平成 21）

[8] エマニュエル・レヴィナス/西山雄二訳『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』,筑摩書房,2010

[9] 同上 P.16
[10] 同上 P.18

【参考文献】

阿満利麿 『仏教と日本人』,筑摩書房,2007

浅野順一 『ヨブ記－その今日への意義－』,岩波書店,1968

エマニュエル・レヴィナス/西山雄二訳『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』,筑摩書房,2010

橋爪大三郎・大澤真幸 『ゆかいな仏教』,三笠書房,2022

橋爪大三郎・大澤真幸 『ふしぎなキリスト教』,講談社,2011

橋爪大三郎・佐藤優 『あぶない一神教』,小学館,2015

小友聡 『それでも生きる 旧約聖書「コヘレトの言葉」』,NHK 出版,2020

中村啓信訳注『新版 古事記 現代語訳付き』,KADOKAWA, 2009（平成 21）

中沢新一 『古代から来た未来人 折口信夫』,筑摩書房,2008

折口信夫『折口信夫全集 ４』,中央公論社,1995（平成 7）

島田裕巳・中田考 『世界はこのままイスラーム化するのか』,幻冬舎,2015

竹村牧男 『空海の哲学』,講談社,2020

内田樹・中田考 『一神教と国家 イスラーム、キリスト教、ユダヤ教』,集英社,2014